

第1部 研究の概要

生徒・教職員が共に学びを深めることができる学校を目指して

1 はじめに

本校は、県内で3校目、福井市内では2校目となる「教科センター方式」の学校として移転開校し、10年目を迎えました。校舎は「風のひろば」を中心としたワンフロアの「全校一体」型の造りとなっており、「異学年交流から生まれる学び」が積極的に展開されることが重視されています。そのような安居中学校の資源を生かして教育活動のあり方を追究し、最大限に教育効果を高めていくことが私たちに課せられた責務であると認識しています。特に小規模校という本校の特性や、生徒の実態・地域性などをふまえながら、育てたい力や目指す生徒像、目指す学校像を明確にし、どのように具現化していけばよいかということについて研究を進めていくことが最も必要なことであると考えています。

2 今年度の実践

令和3年度研究主題 Agencyを育む学び～ 共に創るプロジェクト学習 ～

一昨年度、スクールプランに記載されている「生徒が主役」というキーワードの意味、主役である生徒が主体的に学ぶために何が必要かを再考しました。福井大学連合教職大学院の先生からも御教示をいただきながら再考する中で「自分で考え、自分から責任をもって行動する資質」が必要であることに気づかされました。そこで、OECDが提唱している「Agency」という言葉を用い、「Agency」を「自ら考え、主体的に責任をもって行動する資質・能力」と捉え、「Agencyを育む学び」という研究主題を設定しました。また生徒が自分たちで考え、責任をもって実行し、そして省察を行うプロジェクト学習を、生徒・教職員が共に探究していくために、サブタイトルを「共に創るプロジェクト学習」としました。今年度は、「Agencyを育む学び～共に創るプロジェクト学習」の2年目となります。

昨年度、生徒と共にプロジェクト学習を進めていく中で、これまでよりも実践に時間がかかることを感じました。そこで今年度は、プロジェクト学習を実践するうえで、「見通しをもつ (Anticipation)」について注視して考えるようにしました。すると、本校で行っている「My Learning」の「振り返る」活動において「見直す」ことの大切さや見通すためのポイントについて語られるようになってきました。生徒と教師が共に学びを意識してプロジェクト学習に取り組み、どのような学びがあったのかを個人で、そして学年で振り返ることでAARサイクルがつながり、学校文化が醸成されてきたと思います。10月に行った本年度1回目の「My Learning」では、自分の学びを語るだけでなく、他の人と共有し、学びを深めていくことに主眼を置いて実施し、「深める」ことに挑戦しました。11月の公開研究会の中で行った第2回では、第1回よりも「深める」ことを意識して行われました。またこの第2回では、「教師のMy Learning」として生徒だけでなく、教師も自身の学びについて語り、生徒や参観者と深めました。

他にも、研究会に数回、教職員だけでなく、生徒も参加しました。生徒Agencyを育むために、まずは教師が責任をもって自分の実践や学びを語る姿を生徒に見せ、教師Agencyを育みながら生徒Agencyを育むことに繋げることができればと考えたからです。4月には、「安居中

学校の可能性」について、5月には「育てたい生徒は？」や10月には「教師の My Learning」などについて生徒と教師が共に語り合いました。12月に行った研究会では、生徒の視点で、本校の公開研究会、My Learning について考えが語られました。少しずつではありますが、教職員、生徒がこの安居中学校を創っている当事者であるという意識が育ってきたと捉えています。6月には生徒同士が、自分の学年のプロジェクト学習について責任もって語り合う「ACS(Ago Community Session)」という生徒版研究会とも呼べるものを行いました。

このように、本校では、生徒一人一人が自分の言葉で責任もって語ることに、そして語り合う中で深めていくことを大切に、それを学校文化として育んでいこうとしています。

この10年間で、生徒数が減少し、開校当時の教職員はいなくなり、様々な課題も出てきているのが現状です。さらに依然としてコロナウィルスによる多くの制約で、様々なマイナス面があることも否定できません。しかし、コロナ禍を安居中学校にとって1つの転機と捉え、全ての教育活動を見直し、研究会を重ね、福井大学連合教職大学院と連携しながら教職員のキャリアアップを図り、持続可能な安居中学校を創っていくことができるのではないかと考えています。

<研究の柱>

生徒 Agency を育む

- ◎生徒が主体となり、課題解決型の授業を展開する。
- ◎プロジェクト学習に見通しをもち目的を明確化し、異学年で意見交換する。
- ◎My Learning で自分の学びを語り・深める。
- ◎学年掲示版を活用し、自分の学びを可視化し、学校全体で共有する。

教員 Agency を育む

- ◎「教科で大事にしたいことは？」などをテーマにして学び合う研究会を実施する。
- ◎プロジェクト学習に見通しをもち、教科・道徳と関連づけたカリキュラムをデザインする。
- ◎プロジェクトシート・実践記録を作成して授業公開、生徒の変容を見取る授業研究をする。

生徒・教師の協働により共同 Agency を育む

- ◎生徒が企画を校長に提案する（「校長ヒアリング」）や、生徒と教師が研究会で語り合うなど、共に学校づくりに参画する。
- ◎教師も My Learning に参加して、自身の学びを語り、深める。（公開研究会等）
- ◎生徒・教師が福井大学ラウンドテーブルへ参加する。
- ◎生徒の発達に合わせて各プロジェクト学習へ関わる。

令和3年度 研究会内容

1 学期		2 学期	
4 月	第 1 回研究会 (7 日) ・「安居中学校の可能性」	1 0 月	第 1 0 回研究会 (27 日) ・安居中学校の学びの地図を描く ・教員の My Learning ・図書紹介
	第 2 回研究会 (21 日) ・「スクールプランを考える」		第 1 1 回研究会 (8 日) ・公開研究会の内容について ・提案・一般授業についての協議
5 月	第 3 回研究会 (26 日) ・「授業で育てたい生徒を語る」		
6 月	・プロジェクトシート作成 第 4 回研究会 (2 日) ・「授業構想を語り合う」 ・プロジェクトシート、授業評価 について ・図書紹介	1 1 月	公開研究会 (26 日)
	第 5 回研究会 (17 日) ・「指導案はなぜ書く？」 ・図書紹介	1 2 月	第 1 2 回研究会 (16 日) ・公開研究会を終えて ・総合的な学習の時間のまとめに ついて ・図書紹介
7 月	1 学期指導主事訪問 (5 日) ・提案授業、一般授業についての 研究協議	1 月	第 1 3 回研究会 (14 日) ・研究紀要の様式について ・図書紹介
8 月	第 6 回研究会 (6 日) ・指導主事訪問より ・1 0 月以降の授業公開に向けて (授業をデザインする力) ・ICT の活用について ・図書紹介	2 月	第 1 4 回研究会 (2 日) ・「長期実践研究報告」を読む ・図書紹介
	第 7 回研究会 (25 日) ・1 0 月以降の授業公開に向けて (授業をデザインする力) ・図書紹介		第 1 5 回研究会 (9 日) ・ラウンドテーブルに向けて ・梅村 T のレポートを読む ・来年度の安居中学校づくりの方 向性 ・図書紹介
9 月	第 8 回研究会 (27 日) ・公開研究会に向けて (「学びを深める」とは?) ・図書紹介	3 月	第 1 6 回研究会 (9 日) ・「教師の My Learning」を読む ・「学年プロジェクト学習」を読む ・図書紹介
10 月	第 9 回研究会 (21 日) ・安居中学校の学びの地図を描く ・総合的な学習の時間のふり返り ・図書紹介		第 1 7 回研究会 (14 日) ・「見取る」ことについて ・図書紹介 「研究紀要」の発行

* 第 1 ~ 4、9、10、12、14 回研究会には生徒が参加

3 ふりかえり

令和3年度は、昨年度のような臨時休校にはなりません。年度当初より、教師・生徒が自分の言葉で責任をもって語ることを研究会やMy Learningで実践することができました。生徒は、学校生活において、様々な学びを意識するようになってきていると考えます。特にMy Learningでは、「語る」ことから「深める」ことを意識して実践しました。そのためにMy Learningのグループを予め知らせ、自分のipadに画像を取り込み、「自分にとっても相手にとってもプラスになる」ように質問を考え、準備にこれまでより時間を割きました。「準備の大切さ」を学びとして語る生徒もいました。ファシリテーターを担った3年生は、グループの話題をどこにもっていくと、学びが深まるかを考えて準備を行っていました。

一方で、教師はどうであったでしょうか。第2部、第3部では、教師の授業を通しての学びやそれぞれの学年のプロジェクト学習を通しての学びが書き綴られています。教師の「見通す力」や「見取る力」の必要性を感じている人が多いように思います。本校の研究主題のサブタイトルにある「共に創る」をどのように具現化していくかが、課題となり、その最適解を出すためにも「見通す力」「見取る力」への意識をより一層高めていくことが次年度以降の課題となっているように思います。

第15回研究会以降、「生徒が主役」「生徒を主語」「子供First」の言葉の意味を捉え直すことを幾度なく行ってきました。今一度、意味を捉え直し、私たち教師がどのように生徒と関わっていくべきなのかも問い直していくことが必要になってきていると思います。生徒、教師が「自分の言葉で、責任をもって語り合う」という核の部分は、これまで通り大事にしていきながら、安居中学校がよりよくなっていくような実践に取り組んでいくことができればと思います。

文責 伊部雅之

出典 「The OECD Learning Compass 2030」

「OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来」2020年 ミネルヴァ書房